



大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌



屏風岩石材石蔵 実測調査と研究報告

NPO法人大谷石研究会 理事 小林 基澄
(小山工業高等学校 建築学科 助教)

大谷石研究会では昨年度、栃木県宇都宮市大谷町に所在する石材会社「屏風岩石材」の2棟の石蔵を対象として、小山工業高等学校の学生とともに実測調査を実施し、小林研究室の学生がその成果について研究を行いました。本稿では、その調査の概要と得られた知見について報告します。

大谷町は、軽石凝灰岩である大谷石の産地として広く知られており、近

代以降は建築材料として全国的に利用されてきました。とりわけ明治期以降、採石技術や輸送手段の発展により産業として大きく発展し、地域の景観や文化形成にも大きな影響を与えています。しかしながら、こうした産業を支えてきた石材会社の建築については、これまで十分な調査研究がなされてきたとは言えません。そこで研究会では、歴史的価値の高い石蔵が現存する屏風岩石材に着目し、実測調査を通じてその建築的特徴を明らかに

することを目的としました。

実測調査は2025年12月6日に実施され、小林研究室学生に加え、高専の専攻科1年生も建築の授業もかねて参加し、教員、さらに大谷石研究会会員も集まり、計13名で行いました。当日は、敷地内に現存する2棟の石蔵(西蔵および東蔵)を対象に、外観の寸法測定や周辺環境の把握、写真記録の作成、関係者へのヒアリングなどを行いました。学生たちは班ごとに役割を分担し、スケールや

レーザー距離計を用いて壁面や開口部の寸法を測定するなど、実践的な調査手法を体験しました。

さらにこの実測結果をもとに、製図ソフトを用いて詳細な立面図を作成しています。残念ながら内部については実測はできませんでしたが、事前に所有者の許可を取って少人数で見学を行い、次回に向けた検討を行っています。

【西蔵】

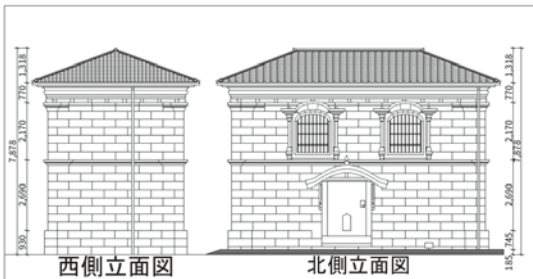
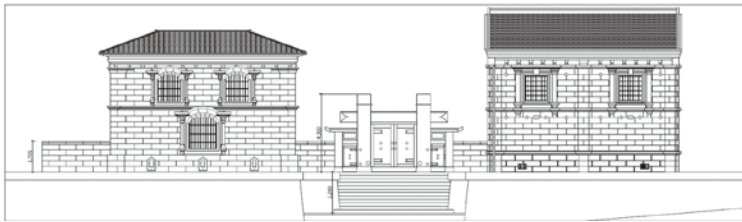
調査対象である西蔵は明治41年に建てられた2階建ての石蔵で、寄棟屋根をもつ積石造建築です。かつては座敷蔵として利用されており、外観には石製の装飾柱やコーナーストーン、キーストーンなどが施されています。これらは洋風建築の影響を感じさせるもので、曲線の繊細な意匠が全体を特徴づけています。一方、内部には畳敷きの空間や書院的な要素が見られ、和風の居住空間としての性格を有している点が確認されました。

【東蔵】

これに対して東蔵は、明治45年に建てられた同じく2階建ての石蔵で、切妻屋根をもつ積石造建築です。地下室を備えている点が特徴で、用途は主に倉庫として用いられていました。外観は直線的で重厚な印象を与え、石製の柱型や底が設けられるなど、和風の力強い意匠が採用されています。内部は大きな空間が確保され、装飾は控えめで、収納や保管機能を重視した構成となっていました。



屏風岩石材の西蔵(左)と東蔵(右)



西側立面図

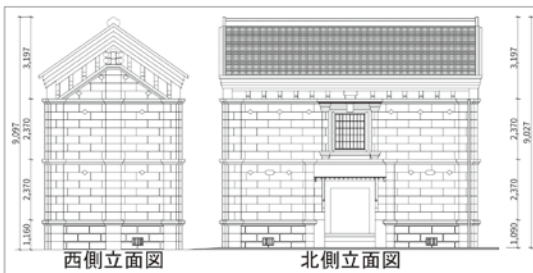
北側立面図



西蔵入り口と立面図



東蔵入り口と立面図



西側立面図

北側立面図